

ハーランが私に飲ませてくれる薬は、とろりとしていて、甘くて、私をふわふわとした気持ちにさせる。

つらいことは何もなく、全部気持ちよくて、うとうと眠っているうちに、気が付くとハーランやマルスさんがいて、自分は何なのか分からなくなるくらい気持ちよくなって、美味しいご飯をたべさせてもらって、体をきれいにしてもらって、きれいな服を着せてもらえる。

だからきつと、これは私の夢なんだと思う。

だって、こんな現実があるはずない。

早く目を覚まさない。

マルスさんが、部屋のカギを開けておいてくれるから、こっそりと抜け出して、ヴィスクに会って、私は大丈夫だよって言ってあげて――。

それで、ハーランのところに戻ってあげる。

仕事を見つけて、住むところを見つけて、全部自分でできるようになっても、私は自分の意思でハーランのそばにいてあげるよって、ちゃんと教えてあげないと。

私が眠っている間に、ハーランはたくさん傷ついて、何も信じられなくなって、二十五年前と何一つ変わらない私を求めたけれど、そんなのは無理だって、ちゃんとわかってるはずだもの。

だってハーランはもう子供じゃないのに、私はハーランに釣り合う大人じゃなくなっちゃった。

後先も考えず孤児院から逃げてきた、なんの後ろ盾もない無力な女の子。

これじゃあ私は、ハーランとの約束を果たせない。

ハーランがどんなに悪いことをしても、私は絶対にハーランの味方になって、きちんと叱ってあげるって。

ハーランは私を脅して、怖がらせて、閉じ込めて言うことを聞かせようとした。でも、そんなことは間違ってる。

だから早く目を覚まさないといけないのに、私は蜂蜜の海を泳ぐみたいな悪夢から抜け出せないままにいる。

かつん、かつんと、今日も足音が下りてくる。

地下室の暗闇にランプの炎がともされて、私の影がゆらゆら、ゆらゆら。

「オーリ、起きてるか？」

答えず、私は顔だけをハーランの方に向けた。

泣きそうな笑顔。

本当に、酷い悪夢だ。

私はハーランにこんな顔をさせたくなんてないのに。

「おいで……ここから出よう」

「……でる？」

「マルスのやつが、もう飽きたんだってさ」

くしゃりと笑って、ハーランは私を抱き寄せた。

そんなハーランの背中を、私はぼんぼんと叩いてあげる。

よく、わからない。

でも、ハーランは少しうれしそうな気がする。

だから、

「よかったね、ハーラン」

そう言って、私も笑った。

「ほら、これかぶって。ずっと地下にいたから、夜でも外はまぶしいだろう？」

「ん……」

ハーランに頭からフードをかぶせられて、私はもたもたと胸元のリボンを結ぼうとした。でも上手くできなくて、ハーランが結んでくれる。

「ありがとう」

ハーランはあいまいに笑って、私の体を抱き上げた。

そのまま本当に地下を出て、私が月を見上げる間もなく、待っていた馬車に二人で乗り込む。

馬がいなくて、馬車が走り出して、私はハーランの膝の上でずっと首を傾げている。

「ハーラン……どこいくの……？」

「んー？ そうだなあ……どこいこつか」

ハーランは私を膝に抱いたまま、なんとなく前後に揺れている。
いつもの悪夢と違う夢だ。

この夢がどこに向かうのか、私には全然わからない。

「オーリはどこ行きたい？ ……ヴィスくんどこ？」

「私は……」

どこに行きたいんだろう。

というか、どこに行けばいいんだろう。

「……わからない」

私は顔を顰めた。

どうしてこんなに、なんにもわからないんだろう。

言いたいことはたくさんあるのに、言葉も全然出てこない。

「ゆっくりでいいよ。大丈夫。ゆっくり考えればいいから」

ハーランはふと荷物を探って、私の手に果物を握らせてくれた。
私はそれを一口齧って、さわやかな甘みに幸せな気分になる。

「美味しい」

「うん。オーリが好きなやつ」

「ありがとう」

私がお礼を言うと、ハーランはまたあいまいに笑った。

変な笑い方。

まるで痛いのを我慢する大人みたい。

「私……仕事したい……」

「ああ……そっか。そうだっけ」

「住むとこ、みつけて……ヴィスクにね、私、一人で大丈夫って、言っただけ」

「じゃないとあいっ、オーリのこと閉じ込めるもん」

くすくすとハーランが笑うから、私もつられてくすくす笑った。

「それから？」

「ん？」

「住むとこ見つけたら、それからどうしたい？」

「えーと……ハーランと住む？」

私は首を傾げた。

ハーランは笑顔を作るのに失敗して、顔を顰めて私を見ている。

私はなんだか自分が間違えたような気分になって、だから私もハーランと同じよう

に顔を顰めてしまう。

「ハーランが……私を閉じ込めたの」

「ああ……そうだな……」

「でも、閉じ込められるのは嫌で……でもハーランが嫌なわけじゃなくて……でも、

でも……ええと……私、目を覚まさない……」

「大丈夫。覚ませるよ。二、三日もしたら薬が抜けて、ちゃんと、全部はつきりわか

るようになるから」

「……そうなの？」

薬。

そっか、薬か。

ハーランが私にくれる薬。

私をふわふわとした気持ちにさせてくれる、あの薬。

「もう、薬、くれないの？」

「うん。もうやらない」

「いじわるだね」

「そうだな。ごめん……ごめ……ッ……!!」

ばたたと、ハーランの涙が私の頬に滴った。
私のせい？

私が意地悪って言ったから、泣いちゃった？

私はハーランの顔に手を伸ばして、その涙をぬぐってあげる。

「私、怒ってないよ、ハーラン」

「そっか……優しいな、オーリは」

「泣かないで。ハーランが泣いてるの、悲しいよ」

ハーランは泣くのをこらえようとして、でも結局我慢できずに、ぼろぼろと涙を流して泣き出した。

私のことをぎゅつと抱きしめたまま、何も言わずに、ずっと——ずっと。

私はそんなハーランの背中を叩きながら、子守唄を口ずさんだ。

小さいころ、ハーランが夜に怯えて、夢に怯えて、嵐に怯えて眠れなかったとき、同じベッドで抱き合いながら歌った子守唄を。

そんな風に抱き合っているうちに、私の方がうとうとしてきて、馬車の中で眠ってしまう。

次に目が覚めた時、私は知らない家のベッドの上だった。

2

「……ああ」

頭が、はつきりしている。

ベッドで半身を起こした私は、両手をゆっくりと握って開いて、ふるふると頭を振って、もう一度ベッドに体を投げ出した。

「あー……そっか……」

何一つ、夢じゃなかった。

唐突に、それに気づいてしまった。

私はハーランに監禁されて、マルスさんに騙されて、鎖で吊るされていいようにもてあそばれて——。

マルスさんが飽きて、ハーランに連れ出された。

苦い記憶で、胃の奥がグルグルする。

吐きそうになりながら私はベッドから這い出して、そっと窓を開けてみた。

あまり期待していなかったのに、あっけなく窓があいて、爽やかな風が吹き込んでくる。

窓から下を見ると、たくさんの人がガヤガヤと行き来している。

左右を見ると、この部屋と同じような窓が連なっているので、どうやらここは集合住宅の一室か何からしい。

上にも同じように窓があるから、五階建ての三階とかかな？

いつまでも外を見ていても仕方ないので、窓を閉めて部屋の中を歩き回った。

クローゼットに服がたくさんあったので、一着選んでいそいそと着込む。

脱いだ寝間着はベッドに広げておいて、そつと寝室から出てみると、そこには小ぢんまりとした居間がある。

台所がないってことは、一階に食堂があつて、食費が家賃に含まれるタイプかな？ 本棚が一つあつて、私の好きな本や、いかにも私が好きそうな本がぎっしりと詰まつてる。

その隣にコルクボードが下げてあつて、求人広告があれこれとピンでとめてある。全部、なんとなく私でもできそうな仕事で——コルクボードの下にある書き物机に、封筒が一つ置いてある。

ハーラン親方から、新しい雇い主への紹介状。

私は苦く笑った。

「ほんとに夢から覚めたみたい……」

長い悪夢から目を覚ましたら、理想的な現実が、そつと用意されている。

さあどうぞ、あなたの人生を始めてくださいというように。

その時だ。

ノックもなくドアが開いて、無言のまま誰かが部屋に入ってくる。

慣れた調子で買い込んだものをあちこちに配置して、上着を脱いでソファに引っ掛ける段階になつて、ハーランはようやく私が立っていることに気が付いて「うわ！」と小さく悲鳴を上げた。

しばし沈黙。

見つめ合い、ハーランはぎこちなくへらりと笑う。

「目、覚めた？」

「うん」

「体、平気？」

「うん」

「少し……俺と話せそう……？」

「うん」

「よかった……」

心底安堵したように、ハーランは破顔した。

「ソファに座つてて。腹減ったろ？ 食堂でお湯とサンドイッチもらってきたんだ。

今お茶入れるから」

言われるままにソファに座つて、私はハーランがお茶とサンドイッチを配膳してくれるのを静かに待った。

サンドイッチは野菜と卵がたっぷり挟まっていて、飲みやすい温度のお茶は寝起きの乾いた体に染みわたる。

「美味しい」

「だろ？ 下の食堂で大家からもらってきたんだ。——この大家は信頼できるよ。飯も美味しいし、困ったことがあれば何でも相談に乗ってくれる」

「ハーランの知り合い？」

「いや……あー……そうだな。そう……知り合い。ごめん、嫌かもしれないけど、ほんとにオーリにとつては、ここが一番いいから」

「私何も言っていないけど」

「ああ、そっか……ほんとだ、ごめん」

「謝ってばかりだね」

「え？ ああ、ごめ……」

言いかけて、ハーランは顔を顰めて黙った。

沈黙。

私はサンドイッチをぺろりと平らげて。ポットからカップにお茶を注ぎ足す。

「……あの、さ」

「うん？」

「何か……俺に言うこと……ない？」

「うーん」

お茶を一口。

私は天井をあおぐ。

「いっぱいあると思う」

「……だよな」

「私、壊れなかったね」

「……ああ」

「どうして？」

私は覚えている。

マルスさんがハーランに持ちかけた、いかにも私の精神をズタズタに破壊できそうなの、想像するのもおぞましい責め苦の数々。

でもその全部を、ハーランは跳ねのけた。壊れろ、壊れろと言いながら、ハーランは私を抱きしめて、誰にも壊させないように必死だった。

ハーランは私の目をまっすぐに見られないまま、じっとテーブルを睨んでいる。そしてようやく、

「できなくて……」

と、弱弱しく答えた。

「つていうか……普通、あれだけされれば壊れるんだ。閉じ込められて、吊るされて、犯されて……あれだけで充分なんだよ。なのにオーリは壊れなかった」

「本当に壊したかったなら、薬なんて飲ませなければよかったのに」

「そんなことしたら、目えはなしたすきに自殺しちまうよ」

「口枷とかはめて、手足を縛ればよかったんじゃない？」

「オーリは、そうされたかった？」

「ハーランは、そうしたかった？」

ハーランは口を開きかけて、ゆるゆると首を左右に振った。

私は少しほほ笑む。

「私が壊れなかったんじゃないよ。ハーランが私を壊さなかった——そうでしょ？」

「……わからない。ごめん、俺……ごめん」

沈黙。

ふと、ハーランは顔を上げる。

「あのさ。この部屋の家賃と食費、十年分先払いしてあるんだ」

「え？　すごい」

「コルクボード、見た？」

「うん。見た」

「評判のいい親方の仕事、いくつか見繕っておいたから。俺の紹介状があれば雇ってもらえるよ。絶対に」

「うん」

「生活費も大家に預けてあるから、毎月大家から受け取って。足りなくなったら大家に言えば、俺に伝わるようにしておくから。家具とか服とか適当にそろえちまったけど、時間をかけてオーリが好きなものと入れ替えていけばいい。だから——」

「——だから、全部忘れて許してほしい？」

ぐつと、ハーランが奥歯を噛んだ。

沈黙。

ハーランは口を開いたり閉じたりしながら、何も言えなくなっている。

弱弱しいため息。

苦い作り笑いとともに、ハーランは口を開いた。

「ただ、自由に生きてほしいんだ。俺は二度とオーリに顔、見せないから」

「ハーランの顔を見なくても、二度と忘れられないよ」

「わかってる……きつと……何度も思い出して……いつまでもつらくて……男にさわられただけで吐いて……夢に見るたびに、悲鳴を上げて飛び起きる……そういう事を、したって、わかってる」

「そんな私を置いて、ハーランは一人で自由に生きるってこと？」

「違う！」

ハーランは縋るように私を見た。

「違うけど……でも……」

またうつむく。

「オーリは……俺にどうしてほしい？ 何でもするよ。俺。死ねって言うなら、今すぐ窓から飛び降りる」

「言わないよ、そんなこと」

「……だよな。でも、だったら——」

「宝物みたいにな、大事にしてくれるんじゃないの？」

はっと息を飲み込んで、ハーランは顔を上げる。

「私、ハーランのお姉ちゃんでいたかった。だから、ハーランに仕事を用意してもらうのが嫌だったの。ちゃんと全部自分でしたかった。ハーランを信じてなかったわけじゃない」

「……うん」

「ハーランは私と恋人みたいなキスがしたいだけって言ってたけど……ハーランは、私と恋人になろうとしてくれなかった。脅して、怖がらせて、無理やりキスして、嘘で好きって言わせようとしただけだった」

「だって……!!」

「だって？」

「だって……オーリは……俺のことなんて、好きになってくれない、って……わかってた、から……」

「だめだよ、ハーラン。試しもしないで、手に入らないって決めつけて、力づくで奪うなんて、絶対にだめ」

「……うん」

「今からでも、頑張れる？」

質問の意味がよく理解できなかったのか、それとも理解したからなのか、ハーランは私の様子をうかがうみたいに、中途半端な表情のまま固まった。

私はソファから立ち上がって、ハーランの隣に座りなおす。

ハーランはぎくりとなつて、一瞬私から離れようとした。

だけど私はハーランの膝に手を置いて、その場にとどまらせる。

怯えた子供のような青い目が、私と、私の手を行き来する。

「オーリ……？」

「口説いてみて」

「え、あ……」

「私を怖がらせしないで、私のことが好きなんだって、言ってみて」

ハーランは息をのんだ。

視線はついに私の姿をとらえられなくなって、やみくもに床や壁をはい回る。

私はそんなハーランの顔を両手で包んで、無理矢理私に向けさせた。

「言えない？」

「う……」

「私がハーランのこと嫌っても憎んでも、私のことを好きって言ったのは、嘘？」

「う、嘘じゃない……！」

ハーランは私の両手をつかんだ。

「ハーラン、それ、怖いよ」

「あ、ごめ……」

つかんだ私の両手を放して、行き場を失った両手は宙をさまよって、ハーランの顔を覆った。

顔を覆ったままハーランは天井を仰いで、深い、深いため息とともに改めて私を見る。

泣きそうな笑顔。

壊されるってわかっていながら、大切なものを差し出すような、痛みを笑顔で無理矢理隠したみたいなの。

「好きだ」

「うん」

「ガキのころは、よくわかんなくて……オーリはヴィスクと結婚するんだって思ってた。でもオーリが眠って……俺たちだけが大人になって……ヴィスクとだって張り合えるようになって……俺もオーリが欲しくなった」

「うん」

「なのにヴィスクは俺からオーリを隠してて……オーリは俺を怖がるし……どうしたらいいかわかんなくなって……」

「だって、これ」

私はハーランの入れ墨をそっと撫でた。

「怖いよ、ちよっと」

ハーランはへらりと笑う。

「だよな。うん……怖がられるために入れたんだ」

「ハーラン、優しい顔してるもんね。怒ってもかわいくて、よくヴィスクに全然怖くないってからかわれてた」

私がそう言くと、ハーランはまた苦しそうに笑った。

さつきから、笑うような場面じゃないのに、ハーランは無理矢理笑ってばかりだ。私はそんなハーランの顔をさらりと撫でる。

「でも、私の小さな泣き虫ハーランは、昔と全然違って……大人の男の人になって、体も大きくて、入れ墨だっていれて……私はあの時ヴィスクに『そういう目』

で見られた直後で、男の人が少し怖かった。孤児院のお姉さんと、可愛い子供たち。そういう関係が壊れて、男と女になるのが怖かった」

「うん……わかるよ」

ハーランは、そっと私の手を握った。

今度は振り払わずに、ハーランの好きなようにさせてあげる。

ハーランは私の手に唇を押し付けて、子猫みたいに頬を摺り寄せた。

「俺、なんにもいらないよ。もう欲しがらない。——オーリのことも」

「そうなの？」

「ただ、そばにいらさせて。会いにきたりしないから。遠くから、オーリが幸せなところを見ていたい」

私は思わず噴き出した。

「それって、全然口説いてない」

「ああ……ほんとだ」

つられたように、ハーランもへらりと笑う。

その笑顔が、子供のころのハーランとあんまりそっくりで、胸が苦しくて、私は泣きそうな気分になる。

地下室で過ごした毎日。

鎖の音。

混ざり合った体液の臭い。

薬で濁った意識の向こうで聞こえていた、ハーランのすすり泣き。

繰り返す日々の中、マルスさんが地下にこない日はあっても、ハーランがこない日は一日だってなかった。

マルスさんが来ない日のハーランは優しくて、本当に優しくて——。

きつとこの優しさで、私はいつか壊されるんだと思った。

あるいは。

わたしは。

もうとつくに。

「……壊れちゃってるのかな」

「え？」

私が呟くと、ハーランは不思議そうに聞き返す。

私はそんなハーランの唇を、指先でなぞった。

そっと唇を近づけると、ハーランはびくりと怯えて、だけど辛うじて逃げるのをこらえて、私の唇を受け入れた。

私たちはもう、お互いのキスの仕方を知っている。

どうやって舌を絡めるのが一番気持ちいいか、知っている。

私が肩を押すと、ハーランは素直にソファに倒れた。

私はハーランの腰の上にまたがって、存分にその唇を味わう。
唇をはなすと、つうと唾液が銀色の糸を引いて、ふつりと切れた。

私が手の平を置いているハーランの胸から、鼓動の高鳴りが感じられる。
ただどハーランの表情は不安で引きつり、青ざめている。

興奮の鼓動じゃない。

これは不安と恐怖の鼓動。

私は微笑んだ。

これは優越感だろうか。

ハーランも怯える私に対して、こんな気分になったんだろうか。

「オーリ、だめだ……」

「何が？」

「だって、こんなの……おかしいだろ……？」

「だって、私たち恋人同士でしょ？」

「オーリ……」

「怖がらないでハーラン。怖くない、怖くない」

優しくなだめながら、私はハーランのシャツのボタンをはずしていく。

シャツをはだけて、剥き出しになったハーランの胸板に、私は尖らせた舌を這わせ
ていく。

ハーランが私にそうしてみたに。

「あーあ。乳首立っちゃってる」

くすくすと笑うと、ついに我慢できなくなったハーランが起き上がり、私を引きは
がした。

両肩を強くつかまれて、私は身動きができなくなる。

ハーランは肩を震わせて、唇を噛んで、何も言わないまま私の胸にそっと額を押し
付けた。

そして、

「ごめん……」

と呟く。

胸のあたりが、じわりとしめって、あたたかい。

「どうして泣くの？ ハーランが私にしたことなのに、私にはさせてくれないの？」

「ごめん……でも……」

「でも？」

「普通の……恋人みたいに……したい……」

ハーランは私の胸に顔をうずめたまま、私を抱き潰せそうな男の腕で、子供みたい
に私に縋った。

「わかってる……もう無理だつて……！　俺が何しても、オーリは怖い思いすることになる……！　俺がそうしたんだ……全部、俺が……！　だから……！」
私はそんなハーランのそつと抱きしめて、わけもわからず溢れてくる涙でハーランの髪を濡らす。
ソファで抱き合ったまま、私たちはしばらくの間、傷をなめ合うわけでもなく、それぞれ勝手に涙を流し続けた。

3

どちらともなく泣き止んだとき、私たちはなんとなく空っぽで、寄る辺なくて、離れがたくて、孤独だった。

窓からは暖かい日差しが差し込んで、人の往来が賑やかで――。

「なあ。外、遊びにいこっか」

ふと、何気なく差し出されたハーランの手を、私は躊躇なく握り返した。

ねばりつくような非日常にうんざりして、穏やかな日常に飢えた私たちは、手を取り合って外に出る。

「外、出るの久しぶり」

「人多いから、気を付けて」

ハーランの言う通り、通りは人でごった返していて、ちよつとでもハーランと手を離れたらすぐにはぐれてしまいそうだった。

私はほとんど必然的に、ハーランの腕に自分の腕をぴったりと絡めて歩く。

「ハーランはどこに住んでるの？」

「ん？　まあその辺で、適当に部屋借りてる」

「この町に部屋を借りたの？　じゃあ、仕事は？　マルスさんは？」

「さあ」

「さあつて――」

「みーんな、捨ててきた」

ハーランはいたずらっぽく笑った。

私は啞然となつて、立ち止まってしまうけど、ハーランはそんな私の手を握ったままぐいと引く張る。

「道の真ん中で立ち止まると危ないから」

「あ、ごめん。でも――」

「大丈夫。俺がいなくても、みんな自分でどうにかするさ。そうできるように鍛えてあるから」

「でも……」

「商売なんて、また一から、いくらでも始められる。俺って結構有能なんだ」

「ねえ、ハーラン。ここってどこなの？」

「んー？ まあ、遠い遠いどこかの国って感じかな」

ここまで言われてようやく、私は通りですれ違う人々が口にする言語が、一種類ではないことに気が付いた。

私たちと同じ言葉をしゃべってる人もたくさんいるけど、それ以外の方がはるかに多い。

「ほんと言うとさ、今までの町より、ここの方が商売はしやすいんだ。二年もすれば、前より規模の大きい取引ができるようになる」

「そう……なの？」

キラキラ、キラキラ。

日の光の中で話すハーランはまぶしくて、最近まで地下室の闇の中にいた私は、まっすぐ見ていると目が痛い。

あの日、市場で会ったハーランは——私が私だと気づいていなかったときのハーランは、確かにこんな顔をしてた。

「ほら、この店。凍らせた果物を砕いて、水に混ぜてあるんだ」

ハーランが買ってくれたフルーツジュースは、キンキンに冷えてて、爽やかな酸味ととけるような甘さがあつて、私はすぐにこのお店が大好きになった。

その後もハーランは私の手を引いて、町のあっちこっちに歩き回って、私が気に入るような店をあれこれと紹介してくれる。

「なんだかデートみたいだね」

私がふと呟くと、ハーランはびっくりしたように目を見開いて、くしゃりと子供みたいに笑った。

町を歩きながら、何気ない話をたくさんした。

私が眠っていた二十五年の間に、どんなことが起きたのかを聞いた。

そして、入れ墨の理由も聞いた。

自分で聞きたがつたくせに、私は最後まで聞き終える前に泣き出して、ハーランを困らせた。

「泣かないで、オーリ」

小鳥が死んだと泣き喚く子供をあやすみたいに、ハーランは指でそっと私の涙をぬぐい、困り果てたように首を傾げた。

「昔のことだよ。俺に同情なんてしなくていいんだ。ああ……ごめんな。適当にはぐらかしとけばよかったのに、俺……また間違えちゃった……」

私はハーランを抱きしめる。

抱きしめてあげたいのに、私の方が小さいから、ただハーランに抱き着く子供みたいになっちゃう。

ハーランはそんな私を抱きしめて、とんとんと背中を叩いた。

「違うよ、ハーラン。私が慰めてあげたいのに……」

「わかってる。わかってるけど、こうさせて」

日の暮れかけた異国の町で、人通りを避けるように抱き合う私たちは、きつとはた目には恋人同士に見えるだろう。

私がいつまでも泣いていると、ハーランはくすくすと笑いだした。

「ハーラン？」

「いや、ごめん。なんか……なんで俺、最初からこうできなかったのかなって思ってた。だって俺、こんなに幸せだ。オーリが俺のために泣いてくれてるだけで、こんなにうれしい」

「ハーラン……」

「俺、ほんとに……オーリのこと大好きだ」

日の光を浴びてキラキラしていたハーランの笑顔は、赤々とした夕日にも映えて、すごくきれい。

「私も——」

「うん？」

「私も……ハーランのこと……好き、だよ」

これは、ただの同情なんだろうか。

だけど、あふれて止まらない。

この人を——この子を、私の泣き虫ハーランを愛してあげたくて、許してあげたくて、抱きしめてあげたくて。

「ねえ、ハーランの部屋、見てみたい」

私の言葉に、ぎくりとハーランが固まった。

「それはその……ちよつとどうかな……」

「どうして？」

私はじつとハーランを見る。

ハーランは気まずそうに眼をそらし、口を閉じつ開きつしてから、ようやく、

「その……オーリの部屋の……上の部屋、だから……」
と言った。

「……それって」

「ち、違う！ わざとじゃないんだ、ほんとに！ ちゃんとした部屋が見つかるまでの仮宿のつもりで借りたら、ほかに空き部屋がなくて……！ オーリに気づかれないうちに他の部屋探す気だったんだ！」

「ふーん？」

「あの……ごめん。だから俺……今夜は野宿……しようかな……なんて」

しおしおと力を失っていくハーランの語気がなんだかおかしくて、私はハーランの手を握って引っ張った。

「オーリ？」
「帰ろう、ハーラン」

4

なんだろう、気が焦る。
ひどく、時間が惜しかった。

早く二人になりたくて、気が付くと私とハーランは、笑い声を上げながら子供みたいに走り出していた。

宿について、階段を駆け上がって、ハーランの部屋に飛び込んだ瞬間に、私たちは舌を絡め合いながらお互いの服を脱がせ合った。

走ってきたせいで私たちは汗だけで、だけど汗のにおいが心地よくて、抱き合ったままベッドに倒れこんで、私はハーランに馬乗りになる。

「俺が上になりたい」

「だめ。私が上」

起き上がろうとするハーランを押し戻して、私は叱るみたいにキスをする。

だけどハーランは私の腰を抱え上げるようにして、ほとんど力づくで起き上がってしまった。

「こら……!! もう……!!」

「でもオーリは、こっちの方が好きだろ？」

腰をびったりくつつけたまま、私とハーランはベッドの上で、向かい合わせに座っている。

ハーランは私の首筋や鎖骨にせつせと唇を押し付けて、ハーランが唇を離すたびに、私の皮膚には赤い痕が散っていく。

呪わしいくらい、子供じみた独占欲。

あの日、恐ろしいと思ったそれが、どうしてか今は、くすぐたくて心地いい。

「こっちの方が、俺も好き。オーリがぎゅーってしてくるから」

ハーランの指が、くすぐるように私の腰を撫でた。

快楽を期待して硬くなった私の胸の先に、ハーランの舌がふれて、私はぴくりと肩を跳ねさせる。

そして私はハーランの思惑通り、柔らかな赤毛をぎゅーつと抱き寄せた。
とろりと、私は体の内側から溶けていく。

じりじりとしたもどかしさに私が腰を押し付けると、ハーランはやすやすと私の奥まで入ってきた。

焦れるような、ひりつくような、こらえられない感覚に、私はハーランの耳元で鼻にかかった吐息をこぼす。

ハーランはゆつくりと、私の一番奥をゆるゆると貫いた。

「ハーラン、それだめ……それ……すぐ、に……あ……」

「いっていいよ。大丈夫。オーリがしたくなくなったら、すぐやめるから」

「だめ……やだ、一緒がいい……一緒に……」

「無理だよ。オーリはめーちゃくちゃ感じやすいんだから。だってほら、こうするだけで――」

「やつ……ああ……!」

ハーランがイタズラに腰を突き上げるだけで、私はあっけなく達して、どうしようもなくハーランの肩に縋りつく。

だけど、いつもみたいに追い詰めるようなことはしないで、ハーランは私が落ち着くのを静かに待っていてくれる。

まどろむような心地よさと、物足りない焦燥感。

私は快樂の残滓を探すように、ゆるゆると腰を揺らした。

「オーリ?」

「ん……まだできる」

「無理しなくていい」

「してない……してないから……ね? ちゃんと、ほら……」

「ッ……あ……ちよっと待った……オーリそれ……俺ほんとそれダメだから……!」

ハーランは責めるのは得意だけど、責められるのはすごく苦手。

私が積極的に動くとき急に余裕がなくなって、そんなハーランの方が、私はかわいく好きだと思う。

余裕ぶつてたハーランの息が激しく乱れて、とうとう我慢できなくなつて、ハーランは私をベッドの上に押し沈めた。

「ごめん……怖いよな……これ、ごめんな……」

「平気……あ、平気、だから……大丈夫、大丈夫……あ、ああ……!」

私はハーランの背中に手をまわして、キリキリと爪を立てた。

ハーランは自分の快樂に追い詰められるみたいに激しく腰を突き上げて、下品で淫猥な音が、ベッドが軋む音と混ざり合う。

ハーランが動いたときに、さっきより大きな快樂の波が、私の中でどんどん大きくなっていく。

嬌声を奪うように、ハーランが私に口づけた。

お腹の奥の方をぐちゃぐちゃにかき混ぜられながら、口の中まで蹂躪されて、私はぼろぼろと涙を流し、気を失うような終わりを待ちわびている。

「ん、んう……ふ、う……んん……ッ……んん……!」

突き上げられるたびに全身が引きつって、少しもいう事を聞いてくれない。

ハーランは私の両ひざを抱え上げて、二度、三度と強く貫き、重ねた唇の隙間で甘い声を上げながらぶるりと腰を震わせた。

私のつま先がきゅうと丸まって、体の奥深くが激しく波打ち、ハーランが吐き出す熱く濁った白濁を、最後の一滴まで搾り取ろうとする。

張りつめた糸が、ふっとゆるんで、私はくたりとハーランの背中から手を離れた。

ハーランはそんな私にキスの雨を降らせながら、私の中から萎えたものをゆつくりと引き抜く。

「あー……喉からっから」

くすくすと、ハーランが笑った。

「うん。喋るのつらいね」

私も笑い返して、けだるさを押し返すように起き上がる。

「待ってて。何か持ってくるから」

ハーランは私の額にキスを残してベッドから出ていくと、キラキラと輝く氷が目にもぶしいフルーツジュースを持ってきてくれた。

「すごい。氷だ」

「この町には氷売りがいるから、保冷容器に入れておけば、朝に買って夜までもつんだ」

「その氷って、どこから持ってくるの？」

「山の上には、夏でもいつも氷があるって話だけど」

「へえー。すごい」

一気に飲み干すと、すぐにおかわりを注いでもらえる。

至れり尽くせりだ。

今度はちびちび舐めながら、私はハーランの肩になんとなく体重を預ける。

「俺、このままここに住んでもいい？」

「うん」

「仕事が落ち着いたら、二人で暮らす家を買おうか」

「うーん、それはどうかなあ」

私が勿体つけると、ハーランは私に怯えたような視線を送る。

私はそんなハーランに、にっこりと笑いかけた。

「だって、私たちまだ恋人だし」

「……恋人……」

「ハーランがちゃんと恋人できたら、結婚してあげるかも？」

「す、する……！ちゃんとするよ、俺。ちゃんとできるから！」

ハーランは私を抱きしめる。

「たくさん試して、俺のこと。どんなワガママだって、絶対に叶えてやるから」

「そんなこと言ったら、お姫様みたいにワガママになっちゃうかもよ？」

「いいよ。大丈夫」

脅かすつもりで言ったのに、ハーランはむしろ嬉しそうに目を細める。

「俺の可愛い眠り姫。俺以外の男じゃ手に負えなくなるくらい、ワガママな女にしてやるから」

うーん……根本的に、私をダメにして自分だけのそばに置いておきたいっていう願望は変わらないんだなあ。

まあ、監禁されるよりはずっといいか。

なんとなく諦めて、私はのどがひりつくくらい甘いフルーツジュースを飲みほした。